

## ●図書紹介●

### 『社会科における 役割体験学習論の構想』

井門正美著

本書は、著者が実質的に9年間に及ぶ精緻な論理構成と精力的な自らの授業実践を通して完成された、文字どおり重厚でしかも刺激的な学術書である。この大著について、筆者がここで限られた紙幅のなかでどの程度的確にその意義・価値を述べることができるか心許ないが、少なくとも強い印象を受けた点を中心に紹介することにした。

本書は、全6章で構成されており、その圧巻とも言える中心章は、「第4章 役割体験学習の実践『SIM TOWN【井角町】』の開発と実践」である。この章において、社会科公民分野の役割体験学習教材として著者自身が開発した中学校5（単位）時間構成の討論による授業の設計・展開・評価が詳細かつ冷静に論述されている。すなわち、この授業はこれまでの社会科教育の問題点として著者が指摘する外観主義・言語主義・自省作用の希薄さを改善するための自己修正的教授・学習システムの構築を企図したものである。具体的には、仮想地域社会「井角町」に起きたリゾート開発についての集団による問題解決をねらったもので、その学習方法が「役割体験学習」なのである。つまり、学習者に町長、開発会社社長、りんご園経営者など町の関係者（全38名分の役割）をそれぞれ担当させて、町の開発計画の是非を役割演技によって討論させる学習方法が採用されている。

著者自身が、1990年6月に群馬県の公立中学校3年生の2クラスで実施した授業内容の詳細な事例分析を通して、この教授・学習システムの有効性が冷静かつ緻密に検証されている。筆者は、この章の記述を読むだけでも、平板な討論授業とはおよそ異なる深みと確かな手応えを生徒が感得した授業であっ

たことがわかる。まさに、著者が定義する「主体がある課題にそって担った役割の総合的な経験」という意味での、質の高い役割体験であったといえる。その後、著者はこの教授・学習システムの有効性を高めるため、自ら別の対象者（教育関係者等）向けの実践を重ねるほか、著者のこの構想に賛意を抱く他の小学校から大学までに及ぶ教師による実践事例を蓄積して、さらに着実な改善を図っている。

以上のような注目すべき成果を得るまでには、周知な研究課題の設定と方法的装備がこの第4章以前において成されている。すなわち、「序章 研究の目的と方法」「第1章 社会科における役割体験学習の必要性」「第2章 社会科における役割体験学習論」「第3章 授業実践報告にみる役割体験」の各章において、社会科教育分野に止まらない先行研究の厳密な検討・吟味を踏まえた論展開が認められる。とりわけ、従前の体験学習論への批判的検討やロールプレイング（役割演技法）についての先行研究成果を統合的に発展させる論究などに、著者の鋭利さと独創性を見いだすことができる。

このように、本書はわが国では従来なかった本格的なアクション・リサーチによる学校教育研究の可能性を明確に提示した、貴重で、しかも刺激的な著作であるといえる。また、著者自身が「終章 研究の成果と課題」において論究しているように、社会科の地理分野や歴史分野は言うまでもなく、他教科においても適用可能性の高い役割体験学習論であると考えられる。したがって、筆者は社会科教育関係者は言うまでもなく、広くわが国の学校教育関係者に本書を強く推奨したい。（上越教育大学 西 穰司）

● NSK 出版，A 5 判，437頁，11,000円（本体）